

鼻茸を伴う慢性鼻副鼻腔炎の感染因子における PCR 解析の検討

廣津幹夫 小野倫嗣 塩澤晃人 楠威志 池田勝久

順天堂大学医学部付属順天堂院 耳鼻咽喉・頭頸科

【背景】欧米では鼻茸を伴う慢性鼻副鼻腔炎を好酸球性副鼻腔炎と定義しているが、我が国では、鼻茸を伴う好中球性鼻副鼻腔炎が散見されており、病態の差異が推測されている。また、好酸球性鼻副鼻腔炎の増悪因子として、Staphylococcal superantigen および真菌が関与する可能性が示唆されているが、その病態における役割は不明である。

【目的】鼻茸を伴う慢性鼻副鼻腔炎の病態に関連する感染因子の同定を行うため、鼻茸細胞内の細菌・真菌に対して PCR 解析を試みた。

【対象と方法】鼻茸を伴う慢性鼻副鼻腔炎 11 症例から副鼻腔内視鏡下手術中に採取した鼻茸組織を対象とし、5種の寒天培地を利用した培養（約2週間）と、細菌・真菌に関する PCR 解析を行った。尚、鼻茸細胞外に存在する菌を除去するため、検体採取後 70% エタノール及び生理食塩水による洗浄を全検体に施した。

【結果】5種の寒天培地を利用した培養では、細菌及び真菌を検出することは出来なかった。また、PCR 解析でも細菌を検出することはできなかったが、7症例から、*Candida parapsilosis*, *Candida glabrata*, *Rhodotorula mucilaginosa* などの真菌を検出することができた。また、PCR 解析にて真菌を検出した鼻茸組織内の3視野での好酸球数は 240 ± 191 であり、ほとんどの症例が好酸球性鼻副鼻腔炎を示唆するものであった。また、PCR 解析にて細菌及び真菌を検出なかった4症例の鼻茸組織内の3視野での好酸球数は真菌を検出した症例に比して有意に低く (56 ± 40)、非好酸球性鼻副鼻腔炎症例を疑わせるものであった。尚、PCR 解析にて真菌を検出した鼻茸組織に対して Grocott 染色をおこなったが局在を確認することはできなかった。

【結論】好酸球性鼻副鼻腔炎の病態に、真菌が関与している可能性を示した。